

村上知行の中国観と帝国主義批判 — 『北平 名勝と風俗』論

MURAKAMI Tomoyuki's View on China and Criticism of Imperialism
: On "Beijing: Famous Spots and Customs"

戸塚麻子

TOTSUKA Asako

(令和五年十一月二日受理)

抄 録

村上知行は満洲事変以前に北京に渡り、日本が敗戦を迎えて一九四六年に引揚げられるまでの一〇年以上を同地で暮らしたジャーナリスト、中国研究家、翻訳家である。

村上の最初の著書は、北京の出版社である東亜公司から発行された、『北平 名勝と風俗』（一九三四年九月一八日発行）である。本書は、村上自身が「序」で語っているように、「北京案内記」であると同時に「北京に関しての随筆」として執筆されている。本書の特色はむしろこの随筆の部分に表れている。中国のかつての封建制に対する批判や、日本や西洋の帝国主義に対する批判、ソビエトに対する見解など、当時の中国と中国をめぐる国際社会に対する認識が示されており、村上知行の「原点」といえるだろう。本稿では、『北平 名勝と風俗』をとりあげ、村上の最初期の思想の一斑について明らかにする。

キーワード…封建制 東洋と西洋 帝国主義 アジア主義 中国の民衆

はじめに

村上知行は満洲事変以前に北京に渡り、日本が敗戦を迎えて一九四六年に引揚げるまでの一〇年以上を同地で暮らしたジャーナリスト、中国研究家、翻訳家である¹⁾。

村上の最初の著書は、北京の出版社である東亜公司から発行された『北平 名勝と風俗』（一九三四年九月一八日発行）である。本書は、村上自身が「序」で語っているように、「北京案内記」であると同時に「北京に関しての随筆」として執筆されている。同時代評でも指摘されているように、本書の特色はむしろこの随筆の部分に表れているといえよう。結論を先に述べれば、中国のかつての封建制に対する批判や、日本や西洋の帝国主義に対する批判、ソビエトに対する見解など、当時の中国と中国をめぐる国際社会に対する認識が示されており、村上知行の「原点」といえるだろう。本稿では、『北平 名勝と風俗』（以下『北平』）をとりあげ、村上の初期の思想の一斑について明らかにしたい。それでは、『北平』とはどのような書籍か、簡単にみておきたい。日本語による北京案内記としては比較的早い時期のものといつてよいであろう⁴⁾。刊行された一九三四年当時、租界があった天津に比べ、北京に住む日本人の数は多くなかった。外務省東亜局『満洲及中華民国在留邦人及外国人人口統計表 昭和九年十二月末現在』に拠れば、一九三四年末の北京在住日本人の数は一、〇七六六人、天津が六、〇九一人であり、北京は天津のおよそ六分の一強であった⁵⁾。このように日本人がまだそれほど多くない時期に本書は執筆されている。

本書の「序」冒頭を、村上は以下のように書き起こしている。

本書は第一に北京案内記である。
第二に北京に関しての随筆である。

〔中略〕

実を言へば、私は北京遊歴の対象となる巨大な古き建築などには、趣味を持つてゐない。私が日常最も心して眺めてゐるものは、北京の民衆である。彼等の生活であり、習慣であり、思想であり、感情である。如何なる虐げの下にも屈せず、何物にも依頼せず、泰然として生き、伸び、殖えて行く中国の驚くべき大民衆の一断片たる北京の、特に中流以下、下層社会の民衆こそ、私にとつては驚異的な魅力なのだ。中国の民衆に比ぶれば、日本の民衆など、或は温室咲きの花のやうなものかも知れない。

このように、村上は本書をまず「北京案内記」であると述べている。実際に、前半では主に北京の代表的な観光名所を取りあげ、見どころや行き方等について説明し、後半では芸能や風俗等について取り上げている。筆者所有の第三版では、写真一六枚に加え、地図二枚（「北京郊内名所」「北京郊外名所」）が附いており、サイズは縦一八二ミリ×横二〇〇ミリ、二五九・〇グラムと小型・軽量で持ち運びやすいつくりとなっている。

なお、『北平』は、初版刊行の二年後、一九三六年一〇月一日付で再版された。さらに二年後の一九三八年五月一日、『北京名勝と風俗』とタイトルを変更し第三版が出され、翌一九三九年

六月に第四版が出版された。初版から第四版まで、本文及び図版に修正はない。ただし、折り畳みの北京地図二枚（「北京郊内名所」「北京郊外名所」）は、初版の段階では附いておらず、再版時に加えられた⁷。地図も第四版まで修正はない。

また、本書では「北平」と「北京」が混在している。本稿では、引用文は本文そのままの表記に従い、地の文では混乱を避けるため「北京」に統一した。また、引用文は、漢字は基本的に現行のものに改め、かなはそのままとした。ルビは基本的に削除したが、一部残した箇所がある。引用文の傍点は原文のままである。

一 中国の封建制と農民

村上は『北平』のなかで、しばしば中国における封建制について言及している。例えば、「第二章 白塔にのぼりて」のなかで、白塔からながめた景山（紫禁城の北側にある人工の山）について解説している。そこで自殺した明朝最後の皇帝、崇禎帝について「無造作に人民から棄てられた『中国の天子』（三九頁）」とした上で、以下のように述べている。

中国では春秋の時代まで神権、及び貴族政治が続き、秦より清に至るまでの、驚くべき長い期間に亘り、封建的専制王権がつづいた。さうした制度的無変化の間に中国古代の学問的遺物には、思ふ存分箔がつけられ、篋棒に勿体ないものとされ、中国の天子に対してもい／＼と抽象的な解釈が加へられて仕舞った。左様な中国の学問を、東洋文化の粹だなど

と買破らないやうに警戒しなければならぬ。

（三九頁。傍線引用者、以後同。）

まず、春秋時代までの神権、貴族政治と、その後の「封建的専制王権」が続いたことにより、「中国古代の学問的遺物」と「中国の天子」には実態を超えた価値が付されてしまったと村上はいう。ここでいう「中国古代の学問的遺物」とは、史跡や文物などだけでなく、それらを生み出す基盤となった思想や哲学を指していると考えられる。そして、「封建的専制王権」のみならず、それを支えた「中国の学問」に対し、厳しい表現を用いて批判しているのである。このような言説は、『北平』の他のいたるところにみることができる。

さらに、右の引用に続き、「中国の天子」について、次のように述べる。

中国の天子とは、簡単に言へば天の代理人だといふのだ。だが、中国人の所謂天なる觀念は、宗教的にも徹底せず、科学的にも徹底しない、頗る曖昧なものだ。さうした天の代理人たる中国の天子は、百姓が假令災害に犯されても、それは天がしたことだと空嘯いてゐられるし、同時に中国の天子は天の代理人だから天に対し祭祀の責任を尽して置けば、百姓など如何な憂目に泣かせても、誰も文句を言ひ出す訳に行かない。凡そ天下に中国の天子ほど勝手な、都合の好い地位は、またとないであらう。だしに使はれた『天』こそ好い災難である。

斯様な中国の天子が、民衆から棄てられたところで不思議はなからう。景山はさうした意味で『中国の天子』の正体を曝露した記念の遺址である。

〔第二章 白塔にのぼりて、三九—四〇頁〕

「中国人の所謂天なる観念」は「頗る曖昧なもの」であるため、「代理人」である「天子」も曖昧で、それゆえ「百姓」に対し責任を持たなかったと村上はいう。そして続けて、「斯様な中国の天子が、民衆から棄てられたところで不思議はなからう」と述べる。ここには、「民衆」に責任を持たず大切にしない権力者は、「民衆」から見捨てられて当然だという考えが述べられている。敷衍すれば、崇禎帝のみならず中国の王朝は、民衆から棄てられることによって滅亡してきたという考えが看取できよう。村上は『北平』以降、この民衆が権力者を動かすという考え方をより強化していくと思われるのだが、それについては稿を改めたい。

また、「第四章 祭祀の遺址」では、天壇について説明しつつ、「中国古来の重農思想」について以下のように述べている。

中国古来の重農思想は極めて階級的なものであり、農を愛するための重農でなく、搾取、剥削のための重農であつた。『君子ハ礼を務メ、小人ハ力を尽ス』とか、『君子ハ心を勞シ、小人ハ力を勞ス』とか、さうした金箔燦爛たる文句も、中味を解剖してみれば欺瞞の口実である。中国で言ふ君子を礼義廉恥の実践者であるなどと、新井白石まがひに考へたら大間違ひで、君子の正体は王と百姓の間に介在し、王に対しては

狐媚の人であり、百姓に対しては血なく涙なき貪慾無比の搾取者であつたのだ。百姓を泥の中に鞭ちつゝ、彼等の労力による收穫をそのまゝ没収した階級だ。さながら虹の五彩にいろどられたかの如く見ゆる中国の学問には、斯うした君子が閑に居してひねり出した邪智の黴が生えてゐる。

（九六—九七頁）

「中国古来の重農思想」は農業や農民を重んじるものではなく、農民を搾取するための思想であつたとしている。そして、「君子」、すなわち儒者は「王と百姓の間に介在」する、「貪慾無比の搾取者」という。「王」「天子」に対してのみならず、それ以上に「学問」を用いてうまく立ち回り、農民搾取を推し進めた者としての「君子」に対し、より厳しい目が向けられている。

続けて村上は、天壇は「百姓に替つて天に祈る——即ち敬神行為の聖処」としてつくられたが、これは「統治階級」が農民の迷信を利用していただけだといひ、「天壇の『^{ミステリ}聖劇』に千金万金を擲つことは惜しまぬ癖に農民には何も与へなかつた」と述べた上で、以下のように続けている。

要するに今日までの、四五千年に亙る支那の一切は、君子によつて捏造された誤魔化しであり、その誤魔化しの破綻が今日の中国の紊乱なのだ。その意味に於て、私は今日の中国の紊乱を、中国のための一大幸福であると見做すのである。

新しき力と秩序とは纏て生れるであらう！

泥の家に棲む大民衆よ！ 汝等が起つて吼ゆることを始め

た時、汝等の声は世界を震撼せしむるであらう。今日までの汝等には、余りにも声がなかつた。
(九八―九九頁)

古代から清朝までという過去について書いてきた筆が、ここでは現代の中国に及んでいる。村上は「今日の中国の紊乱」を「新しき力と秩序」を生むための好機と捉えているのである。

これはどういうことであろうか。これについて考える前に、村上が東洋と西洋をどのようにみているかについて考察したい。

二 東洋と西洋

「第四章 祭祀の遺址」のなかで、天壇の「祈年殿」について、以下のように述べている。

斯うして直面してみると、「中略」円堂のグロテスク味が、一層切実に感知される。藍といはうか、紺といはうか、紫といはうか、極端なる華麗さのなかに一種の深い暗翳をたゝへた琉璃の瓦の、蒼穹を背景として惜みなく放つ燦光の美しさ！ 円錐形に細り行く三層の屋根の、蓋然性といつたやうなものを無視した、篋棒な構成。それ等は西洋の建築美学などとはおよそ縁の遠いものである。太陽に焙らるゝ平蕪のなかに、円頂の天幕を張つて生きた祖先の野性的な記憶を遺伝のなかに持ち、ラマ塔のやうな奇態な建築構成に美を感觸し得る東洋人のみが、はじめて創造し得る様式である。

(八七―八八頁)

一章でみたように、村上は中国の史跡(の一部)を「中国古代の学問的遺物」として批判的に論じている。他方で、そのなかのいくつかに対しては、その美についても語っている。ここでは「祈年殿」に対し賛美しているのだが、「西洋の建築美学などとはおよそ縁の遠いもの」であり、「東洋人のみが、はじめて創造し得る様式」と述べている。ここで取り上げているのは建築であるが、東洋と西洋の文化を、まったく別のものとして捉えていると思われる。「美を感觸」する精神において、西洋と東洋とを異なるものとしてみているのである。

なお、村上はこの「祈年殿」の円頂について、「天に象つたなどといふのは、一切を天にかこつけてゐるた中国の統治階級の誤託に過ぎない」(八九頁)と述べており、「南方支那や熱帯東洋」の建築との共通性を見出している。

以上は建築や文化についての見解であるが、それ以外についてはどうであろうか。村上には本書のなかで、西洋に対する批判を繰り返して述べている。それは西洋の中国に対して行った侵略行為に対してであり、例えば、義和団事件で八国聯合軍が北京に侵入した際、中国の宝物を持ち去ったことを、「世界第一の文明国たる仏蘭西と独逸の文明なる軍人が、文明的な強盗を行ひ、文明的に両国で分配し、文明的にそれぞれの祖国に持帰つた」(第七章 名所ところぐ、一八七頁)と述べている。

また、「第七章 名所ところぐ」の「十二、交民巷」では、現在進行形の問題として以下のように書く。まず、「交民巷」は五月には槐樹、七、八月には合歡の花が咲く美しい場所であるが、

「公使館区域」であり、「公使団が行政警察権を有する治外法権地」であり、「各国の駐屯軍だの、銀行、会社、大商店なども軒を連ねてゐる」（一九九頁）。そして、遊歩道で中国人の保母に守られながら遊ぶ子供や、練兵場等で馬を駆るお転婆な少女の姿を活写したあと、以下のように述べる。

さうした彼女等のスポーツの背景は、連綿としてつらなる
交民巷の外壁だ。いかめしい銃眼が刻まれてゐて、壁といふ
よりも、むしろ堡壘だ！ それが東洋の憂鬱メランコリーを象徴してゐる。

（二〇二頁）

「プロンドの髪」をなびかせながら活き活きとスポーツをする西洋の少女たちであるが、そうした生活は治外法権により守られ、保障されている。交民巷は西洋による中国侵略の象徴にほかならない。義和団事件と異なり、現在の問題であるため、比較的婉曲的な表現を用いているが、西洋の中国に対する搾取を描き、その植民地主義を批判しているといえよう。

さて、ここで「東洋の憂鬱」という表現に注目したい。なぜ「中国の憂鬱」ではなく「東洋の憂鬱」なのであろうか。村上は、他の多くの日本人同様、当時流通していたアジアの連帯を信じていたのだろうか。東洋の盟主である日本が西洋から中国を解放すべきという考えに立っていたのであろうか。次章、日本に対する記述を取り上げ考察したい。

三 日本 の 帝 国 主 義 と 「ソヴエート・ロシア」

一章では、中国の権力者による搾取に対する批判、二章では、西洋の植民地主義批判についてみてきた。本章では、日本に対する言説を検討するが、当然検閲の問題もあり、中国や西洋に比べ控えめな表現をとっている。しかし、それでも、いたるところに日本の軍国主義や中国侵略に対する批判的なまなざしを見て取ることができる。

例えば、「第八章 北京歳時記」で、端陽節について、「日本にいふ端午の節句である。金太郎だの兜だのが飛びだすところだが、北平のはさほど帝国主義的でない」（二二四―二二五頁）と述べている。このように、直接批判するのではなく、レトリックを用いて書かれているのだが、以下はもう少し踏み込んだ表現をとっている。「第七章 名所ところ／＼」の「一、雍和宮」のなかで、中国の「王道」について以下のように述べている。

今迄の中国の『王道』には所謂愚民政策の色彩が強かつた。その一面、驚くべき放任主義で、もあつた。辺疆に在る外族に対しては、その中の王と称し、帝と称するものを籠絡し、彼等がその籠絡に甘んじて、中国の王者を太上皇帝と敬ひ、朝貢をさへ怠らなかつたなら、それで事済みであつた。血眼になつて利権を貪つたり、ガン／＼喊き立て、武装移民を送つたりしなかつた。恐らくそれは中国式に考へた『王道』の顕著な現はれであつたらう。

（二七四頁）

「中国の王道」には「驚くべき放任主義」という一面があり、「朝貢をさへ怠らなかつたなら、それで事済み」というおおらかさがあったと村上はいう。それに對し、日本が「血眼になつて利権を貪つたり、ガン／＼喊き立て、武装移民を送つたり」していることを批判していると読むことができるだろう。「日本」という言葉は避け、レトリックを用いているものの、日本の中国侵略に對する強い非難を見て取ることができる。

また、以下の引用では、日本と中国に「ソヴェート・ロシア」を加えた三つの關係について述べている。

中国では昔から『對』といふことが重視されてゐる。分り易く言へば對照の調和である。建築に左右均斉あり、詩に對聯あり、文に對句あり、自然主義的、又は印象派的な無作法を許さない。此れは封建制度の社会が然らしめたものであり、謂はゞ『封建的統一』である。……仮に此れに對比せらるべきものを求むれば、ソヴェート・ロシアで現に試みられつゝある『社会主義的統一』であつて、此の二つの統一の圏外に遺瀨なくも彷徨しつゝあるのが、日本の銀座や、道頓堀に見らるゝ馬鹿々々しく出鱈目なカフエー建築に窺はるゝところの資本主義末期的な無政府状態であらう。

〔第二章 白塔にのぼりて、二一九頁〕

まず、村上は中国の「對」の重視を「封建制度」の結果であり、「封建的統一」であると述べている。一章で見たように、村上は農民を搾取するものとして封建制を批判しているのだが、他方で

秦の始皇帝による封建制を評価している面もある。「第六章 生きたる歴史」のなかで、万里の長城について説明しながら、秦の始皇帝は「暴君」である一方「驚くべき英才であり、進歩思想の権化」（一五三頁）であつたと述べ、「当時としては破天荒の進歩思想たる封建への飛躍」（一五四頁）は、学者たちには理解されなかつたと述べている。右の引用では、建築、文、詩が例として挙げられていることもあり、否定的な意味合いで「封建的統一」を使用していると読むことには無理があるだろう。

そして、對比される「ソヴェート・ロシア」の「社会主義的統一」も、肯定的に書かれている。村上は本書のなかでソビエトを高く評価しており、例えば「ソビエツト・ロシアのドニエストプロの大発電所」に對し、「国家的事業として、ロシアを活かすために経営された」（二一七頁）と賛美している。また、「ソビエツト・ロシア」の映画、「The land of thirsty」を取り上げ、砂漠地方で一人の地主が水を独り占めしていたが、農民たちが闘争の結果手に入れることができた、というあらすじを紹介した上で、「此のロシア映画の深い意義に心を打たるゝであらう」（九一頁）と結んでいる。

前者は「中国を活かすために営まれずして、実に王者一個人の単なる娯楽のために営まれた」（一一七頁）昆明湖との對比、後者は祈年殿井や玉泉山の水等、北京の「水らしい水が悉く封建王家に占拠されてゐた」（九一頁）こととの比較のなかで述べられている。過去の中国の権力者による民衆搾取に對し、ソビエトの国家事業や民衆の闘争が賛美されているのである。

このように村上は、高く評価するソビエトの「社会主義的統一」

と、中国の「封建的統一」とに親和性を見出す一方、日本は「此の二つの統一の圏外に遺瀕なくも彷徨しつゝある」と述べる。ここから、村上が、中国は日本を盟主として仰ぐよりも、ソビエトを参考にして「国家的事業」を進めた方がよいと考えていたのではないかと想像されるのである。

ほぼ同時期に書かれた「汎回教運動と中国の回族」のなかで、村上は以下のように述べている。

回族も、中国も、ソヴエト・ロシヤも、弱小民族解放の渴望に於ては、同じ線上に佇立してゐる。回族が日本を東亜の盟主に奉せんとしたのは、昔の夢で、ソヴエト・ロシヤこそ今日、の彼等にとり、大なる魅力ではあるまいか？。

引用文のうち傍線部は、村上の二冊目の著書『九・一八前後』に収録される際、検閲により伏字となった¹⁰。ここでは回族について、「日本を東亜の盟主に奉せんとしたのは、昔の夢」と述べているが、中国にも同様の見解をもっていたのではない。村上は日本が盟主となるアジア連帯主義を信じず、「東亜の盟主」たる日本が中国を含めたアジアを領導し、西洋から解放すべきだと考えなかった。

二章でみてきたように、村上は美に対する感性という点に、日本人と中国人を含む東洋人としての共通性をみていた。また、西洋の中国侵略に対し、「東洋の憂鬱」をみた。だが、「今日の中国」が「紊乱」から脱し新しい段階に飛躍するためには、アジアの連帯の名のもと日本に指導されるのではなく、別のルートがあると

考えていた。それは、マルクス主義者が考える、資本主義を經由して社会主義へとという一本のルートとも別の道筋である。中国の近代化には西洋とは異なる独自の道がある、と村上は考えていたのではないだろうか。「泥の家に棲む大民衆よ！ 汝等が起つて吼ゆることを始めた時、汝等の声は世界を震撼せしむるであらう」という表現は、まさにそうした地点から発せられたものであるように思われる。そしてそれは、この段階ではソビエト的な方向性がイメージされていたのではないかと考えられるのである。

むすびにかえて

以上、村上の初の著書である『北平 名勝と風俗』をみながら、そこに表れる村上の中国観と、中国をめぐる諸国への認識を考察してきた。本書は北京案内記という体裁をとりつつも、通常の案内記を越え、村上の思想を強く表しているのである。

日本に対する批判は、中国の封建制度や西洋に対する批判に比べ、直接的ではなくレトリックを用いて表現しているため、現代の読者からすれば、弱いように見えるかもしれない。しかし、当時の読者には、中国や西洋に対するそれより強いものとして受け取られた形跡がある。例えば、注2であげた『国際評論』の書評には「この著者の支那人を愛してゐることの深さもいたるところに出てくる日本人嫌ひ、日本ぎらひの言葉からも察せられる」とある。また、尾崎秀実が書評『九・一八前後』の「北平」のなかで、以下のように述べている。「著者の支那及び支那人に対する好感と同情とは日本嫌ひの故の反動ではないのかと、かつて北京案内

記を読んだ時には感じられたのであるが、ここには日本人嫌いは露骨に現わされては居ないために、かえって『支那好き』の感情が一層深められた感じがする。¹¹ ここで尾崎がいう「北京案内記」は『北平』を指しており、「日本人嫌い」が「露骨に現わされて」いると受けとっていたことが分かる。

このように、日本の帝国主義を批判した本書であるが、当時の北京在住日本人に肯定的に受けとめられたようである。金子二郎は書評「北京の歴史」のなかで以下のように述べている。「村上君の北京隨筆は既に定評がある。好著『北平』（当時は北平だった）は確か同君の処女出版であつたと思ふが、正に「北平の紙価を高からしめた」もの。北京見物の案内書として作られた筈のものくせに、案内書としてよりもむしろ老北京連が我意を得たとし喜んでことを覚えてゐる。」¹²

こうして『北平』は、はじめに述べたように第四版まで出され、読まれ続けた。一九四〇年以降は、本書の内容からみて刊行は難

¹ 村上が北京に来た時期については、村上自身の記述に揺れがあるため、現段階の調査では特定できていない。村上の著書『支那及び支那人』（中央公論社、一九三八年六月）の序に、「私は中国に来てからもう八年になる」と、「昭和十三年四月二十二日」付けで述べており、これに従えば一九三〇年である。一方、『北平十年』（中央公論社、一九四二年三月）の序（一頁）に「私は今年で北京に住んで十三年になる」と「昭和十五年十一月七日」付けで記しており、これに拠れば一九二七年となる。

しかったのではないかと思われる。やがて村上は、日本国内での中国への関心の高まりもあり、北京通、中国通として名を知られるようになっていく。

本稿で考察した初期村上の思想が、今後どのように変化していくのかについては今後の課題としたい。また、本稿では村上の中国の民衆観については十分な検討ができなかった。これについても課題として擱筆したい。

本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）「日中戦争期華北の未公開資料の調査・公開と総合的研究」（課題番号 21K00315）（代表者・戸塚麻子）及び「中国国家図書館所蔵の主要日本語雑誌（戦前期）の総目次作成」（課題番号 20K00357）（代表者・竹松良明）の研究成果の一部である。

『日本近代文学大事典 増補改訂デジタル版』講談社、二〇二二年）の「村上知行」の項目（村松暎執筆）には、「満州事変の二、三年前に上海に渡航。一度九州に帰り、ふたたび中国に渡って昭和二一年まで北京に居を定めた」とあり、北京入りの年を記していない。これは戦後のインタビュー「北京生活二十年 中国に渡った放浪の青春」『中国』（中国の会、第八一号、一九七〇年八月、三六―六〇頁）に附された「村上知行略歴」（三七頁）の記述、「満州事変の二、三年前に上海に渡航、一度九州に帰り、

朝鮮、満州を経て北京にいたる。一九四六まで北京に居を定める」に拠ったものであろう。

また、奈良和夫は、書簡を含め、多く資料を用いて村上の経歴の一部を明らかにしているが、「いつ、北京の地に居を定めたかもはっきりしない」と述べている（『村上知行覚え書（一）』、『日中芸術研究』第三六号、一九九八年八月、一五頁）。その他にも村上の経歴には不明の点が多く、今後の課題としたい。

² 『国際評論』（第三卷第一号、一九三四年一月）に掲載された無著名の書評「北平の随筆的案内記 村上知行著『北平』（名勝と風俗）」では以下のように述べられている。「単なる案内記としてなら嘗て鉄道省から発行された英文の『支那案内』などの方が手際もよし便利でもあらう。だが随筆としては優れたものであり、読んで非常に面白くもある。」（二三八頁）

³ 奈良和夫は「村上知行覚え書（二）」（『日中芸術研究』第三七号、二〇〇二年四月、三頁）で「はじめての著作『北平』は、その後の著作の原点であらう。」と述べている。しかし、その理由については記されていない。

⁴ 先行する日本語の北京案内記としては大正期に脇川寿泉編『北京名所案内 附天津概観』寿泉堂、一九一六年五月）、丸山昏迷『北京』（丸山幸一郎、一九二二年三月）、等がある。ともにゆまに書房より「近代中国都市案内集成」として復刻されている。後者は六六六頁で持ち運びには適していない。森田憲司は、丸山の『北京』を、同じく大正期に出された三巻本の中野江漢著『北京繁盛記』と併せ、「北京に「暮らす」ための案内書」であると述べている（『丸山昏迷』『北京』と中野江漢『北京繁盛記』、『北

京を知るための52章』明石書店、二〇一七年二月、二五頁。『北京繁盛記』は未見。

⁵ 外務省東亜局『満洲及中華民国在留邦人及外国人人口統計表 昭和九年十二月末現在』（復刻版戦前期中国在留邦人日本人統計）第六卷、不二出版、二〇〇四年一月）参照。なお、ここでいう日本人は、同統計の「本邦人」のうちの「内地人」の数であり、「朝鮮人」「台湾人」は入っていない。ちなみに、中国人の数は北京が一、五六八、九五一人、天津が一、二二六、七二五人である。

⁶ ゆまに書房版の復刻『北京 名勝と風俗』（近代中国都市案内集成 第16巻、二〇一二年六月）は、第四版を用いている。

⁷ 筆者が確認したアジア経済研究所所蔵の初版には地図は附いておらず、また破りとられた形跡もないことから、再版時に追加されたと考えられる。

⁸ Yuli Raizman による “The earth is thirsty” (1930) か。

⁹ 『国際パンフレット通信』第六五四冊、一九三四年九月、四三頁。

¹⁰ 福田書房、一九三五年五月、二四九頁。

¹¹ 『社会及国家』一九三五年六月に、白川の筆名で掲載された。引用は『尾崎秀実著作集』第五巻、一九七九年七月、一〇四頁。

¹² 『支那及支那語』第三卷第八号、一九四一年九月、三四頁。